

るとに定め、其間館主が日給二十錢を與へ、其後は四分の歩合として、六ヶ月以上精勤した者は係長に取り上げ、尙年限によつて組長・部長に昇進させ、支部を保管せしめる獎勵の策を取り、苦學生と専心實業に從事する者の便宜を圖つて居るので、毎月一日と十五日の定期休の外、商人は勿論製藥從事の者も休業せず熱心に勉強して居るとの事である、尙帝國藥館・金龍藥館・東京藥館等の行商人に就て記す可きとが澤山あらうが、開業の日が浅いのみならず、微々たるものであるから、追つて掲げるとにして、一先づ筆を擱くことにした。

人生

娘「あの方はあたしが結婚を承諾しさへすれば、何でもやる——命までもやるっていふんです！」

命

母「さうかい、ちやア直ぐに承諾するがいい。あの方は一萬圓からの生命保険にはいつてらッしやるッていふから。」



團菊の逸事

(某劇通の談話)

青々園

▲菊五郎と團十郎とは御互ひに裏合つて居ましたが、團十郎に付合つて貰ふは眞平だと言つた居ました、辨臺から此處な大騙りめ、返事はナ、何と」と言つて呉れるんで、平舞臺に居る辨天小僧が額の血を拭いて『オイ南郷』と碎けるのだが、團十郎のは『返事は何うちや』と軽く言ふから張合が抜けて行けないと菊五郎が言つて居ました。

▲團十郎は其うちや無いが、菊五郎の女形は奇態に當りません、先づ『新皿屋敷』のお薦と高橋お傳ぐらるが女方での當りでせう、其のはかは皆いけません。

▲晩年にも敦盛や虎藏で、水の滴るほど若く見えましたが、其れは前から見た時ばかりで、後向きになつた所は、何うしても老人でした、山門の久吉をした時でも、字を書いて居る間が矢張年寄です、其のくせ

菊五郎が秀調を譽めた事があります、『塩原多助』の時、秀調がおかめで盲の役ですが、見物へ後向きになつた時にも矢張眼をふさいで居たは感心だと能く言つて居ました。



▲曾我の對面で、十郎が五郎を止める時、誰がして股が開きたがるものですが、然し十郎といふ役は和事師だから股が開いては悪いので、菊五郎がすると、斜に向いて居て些とも股が開かぬ、彼は何うしても名人だと團十郎が譽めました。

▲團十郎と菊五郎とが尙だ摺れ摺れで居た頃でした、岩崎に一所に呼ばれて、汝たちが何時までも一座して芝居をする氣なら自分か丸の内へ立派な小屋を建てゝやるが何うかといふ談で、其の時に二人の返事が、私でも小屋を持つた所で仕様が御座いません、是れまで其れで懲りたんで御座いますからといふんで、其の談はトウ／＼御デヤンになつて丁ひました、其れが出来て居ると今ごろ大した物になつて居たかも知れませんが、想出しても惜い事です。

▲其の序に、菊五郎が、今の方の若い奴等は踊つても背の縫目が動かぬからダメだと言つて居ました。何と言つても菊五郎くらゐな名人は滅多に出ますまい、能く手揉の摺みやうを役々によつて違えなければ

成らぬと言つて居ました、昔の轉つきなら四つに疊んで片手で驚つかみにしなければ行けない、所が散髪物の轉つきで其の通りをすると、時代おくれで葛西の兄アとしか見えない、散髪なら手拭を八つ折にして三尺も腰をすらして横で結んだや矢張古風すぎる、グツと上げで前の眞中で結ぶんだ、と其う言ひました。

▲一所に外を歩くと種々な事を眼につけるのが菊五郎の凝性な所でせう、按摩が車に乗つて居るのを見て、其の帽子が氣に入つたと鉛筆で書留めた事がありました、それから芝通りますと、昔風な屋敷の曰窓の下で八百屋が店を出して居ます、其奴を見て何時か舞臺で用ゐたい、と手帖へ書留めた事がありました、斯んな風に始終工夫に怠らなかつたのです。

▲何と言つても團藏とは役者が違ひます、和國橋の藤次で『八百善にしようか、矢張何時もの飯屋にしようよ』といふ臺詞がありますが、菊五郎は最初子供を弄ふ心で『八百善にしようか』と言つて、急に自分の懐ろが淋くて情ないといふ腹で『イヤ何時もの飯屋にしな風に始終工夫に怠らなかつたのです。

▲菊五郎といふ人は、最初にした狂言が屹度よくて、近頃正劇々々といふ言葉を能く聞きますが、私の考では、あれは活歴のことだらうと思ひます。一体活歴といふ言葉は、假名垣魯文さんが初めて言ひ出した言葉ですが、此處にちよつと私の來歴から申しますと私は子供の折に『近江源氏先陣館』の芝居を見たことがあります。その時或る人に、あれは何う云ふ筋かと尋ねますと、其人の云ふのは彼の狂言は裏表のこと

▲菊五郎といふ人は、最初にした狂言が屹度よくて、團藏の赤垣は自分も泣かぬが見物も泣きません、菊五郎のは見物も泣くが自分も泣きます、贅澤をいふと、白を捧に言つて丁ふので面白が薄いのです。
▲同じ赤垣をしても團藏と菊五郎とは大きに違います。團藏のやうに自分が泣かず、それで菊五郎のやうに見物の泣く赤垣なら無類でせう。

▲菊五郎といふ人は、最初にした狂言が屹度よくて、其れを二度目にする見劣りがしました、二度目だと馴れきつて舞臺に餘裕が出来来るから餘計な事をして却て打壊すのです、壇原で手鼻をかむなども書下しの時は爲なかつたが、二度目にやつたんです。

▲八百藏と云ふ役者は名古屋の遊人の慄だといひます、だから松島千太をした時、石定が見て、歩きぶりが何うしても轉つきだと言ひましたさうです。
▲今度歌舞伎座へ来る我童といふ男は妙な所へ懲る役者で、與一兵衛をした時、あれは平右衛門の親父だから

團洲一夕話

櫻外生

からといふんで、役名を寺坂與一兵衛として勤めました、其れから鬼三太をした時に、鬼一の兄弟だから年配が其う違ふ筈は無いと指剝がしで勤めた事がありました。

前號に故成田屋の『名残の口跡』といふを御紹介しましたが、これもまた同優から生前親しく聽きました談話で、充分、後進子弟を啓發するに足ると信じましたから、本欄の割愛を乞ひました。有縁に絶代の名優が心掛はまた違つたもので、僅かに消え易い線香花火的の評判を受けると、忽ち立者顔をして居ります當時の若手などは兎ても及びもつかぬ所であります。

▲活歴と正劇